

# 帰国留学生に対するフォローアップ

—カンボジアにおける訪問調査—

松本久美子

長崎大学留学生センター発行

長崎大学留学生センター紀要

第17号 抜刷

2009年6月

# 帰国留学生に対するフォローアップ ーカンボジアにおける訪問調査ー

松本久美子

キーワード： 帰国留学生 フォローアップ 訪問調査

## はじめに

大学の国際化の推進にとって留学生交流は欠くべからざるものである。留学生交流という場合、従来、現在大学に在籍している留学生を中心に考えられてきたが、近年帰国後（卒業後）の留学生に対するフォローアップも含めて総合的に考えられるようになってきている。

筆者は2009年3月12日から3月18日までカンボジアに滞在し、帰国留学生に対するフォローアップ<sup>1</sup>を行った。首都プノンペンでは在カンボジア日本大使館を訪問し、カンボジアの国内情勢、日本留学から帰国した元留学生へのフォローアップ事業等について情報を得た。また、長崎大学で学位を取得し、帰国した元留学生3人に対してインタビュー調査を行うとともに、元留学生の現在の勤務先（カンボジア環境省等）を訪問し、彼らの現在の状況をより正確に把握するために情報収集に努めた。

本稿ではまず日本で帰国（卒業）留学生のフォローアップにかかわる政府およびその関係機関のフォローアップに関する現在の方針と実施されている事業について概観する。次に今回の訪問調査で得られた情報をもとに、本学のカンボジアからの国費留学生の帰国後の状況について報告し、帰国留学生に対するフォローアップの現状とその在り方について若干の考察を行いたい。

## 1. 帰国留学生に対するフォローアップ

### 1-1 文部科学省による通達とその方針

平成20年7月8日付(中央教育審議会大学部会留学生特別委員会)の「『留学生30万人計画』の骨子」とりまとめた考え方に基づく具体的方策の検討(とりまとめ)<sup>2</sup>には、留学生に対する卒業後のフォローアップについて「留

学生を受け入れる魅力ある大学づくりと受け入れ体制」の項目の中で以下のように記されている。

「留学生が留学先を決定する上で、親族や友人からの推薦などのいわゆる口コミは重要な要因となっている。そのため、卒業した留学生に対するフォローアップは大学等のみならず我が国にとっても有益な人的ネットワークを構築することから、一層重視することが必要である。

国費留学生に対しては、新たに卒業・修了後の住所等の情報を収集する仕組みを日本学生支援機構を通じて構築しているが、これを一層充実させ活用することが重要である。

外務省が行う帰国留学生に対する各種支援事業の推進や在外公館の機能の活性化も、帰国した留学生がその親族や後輩などに対し日本留学を薦めたりする例が見られることや、現地の帰国留学生会が日本学生支援機構の留学フェアの実施に大いに寄与するなどその活動の重要性に鑑み、その充実が望まれる。

大学等でも、最近、同窓会組織の構築・充実させこれを基にさらに優秀な留学生を獲得しようとする動きが見られるが、これが大学等の国際化の取組の一環として一層拡充されることが重要である。

なお、在外公館と大学等が一体となって、現地でフォローアップの取組を推進することや、現地の学協会との連携などにも留意が必要である。」

これに続いて、平成 20 年 7 月 18 日付で文部科学省から高等教育局学生支援課長名で各国公私立大学（短期大学を除く）・各国立高等専門学校・関係専修学校の留学生担当部長に宛てて「留学生の卒業後のフォローアップについて」と題して以下のような通知<sup>3</sup>が出されている。

「.....留学生の受入れに当たっては、在学中の支援はもとより、卒業（又は修了）後の動向を把握することによりフォローアップを積極的に行い、元留学生との関係を適切に継続していくことが、元留学生及び受入れ機関の双方にとって大変重要です。

つきましては、各受入れ機関において受入れた留学生について、データベースを作成する等により、可能な範囲で卒業（又は修了）後のフォ

ローアップを行い、各機関における留学生交流、さらには国際化の一層の推進に努めていただくようお願いします。」

特に、国費外国人留学生については、制度の趣旨に鑑み、奨学金支給期間終了後のフォローアップを継続的に実施するので、奨学金支給期間終了後の連絡先等の情報を収集し、文部科学省の留学生交流室国費留学生係へ提出するよう依頼されている。これは日本学生支援機構（JASSO）が進めている帰国外国人留学生のデータベースに登録され、元留学生との連絡、元留学生に対するフォローアップの充実等に資することが期待されている。

## 1-2 外務省におけるフォローアップ

外務省ホームページ(留学生交流)<sup>4</sup>によると、外務省では帰国留学生を「日本での留学経験を活かして母国の社会で活躍するとともに、引き続き日本との架け橋となり、対日理解・友好関係増進へ貢献する貴重な人材」であるとし、留学生 OB、OG と日本との繋がりを維持することを目指して、現地の在外公館を通じ、以下のような帰国留学生支援事業を実施している。

- (A) 帰国留学生名簿の作成支援
- (B) 帰国留学生会（元日本留学者の同窓会）の組織化支援、各種同窓会活動に対する支援、懇談の機会の提供、会報の作成・配布に対する支援
- (C) 講演会開催等により、元日本留学者に対し日本留学成果を発表する機会を提供。
- (D) 国際交流基金を通じた帰国留学生集会施設（事務所）経費の補助（ASEAN 諸国の帰国留学生会を対象）。
- (E) 「元日本留学者の集い」（母国で活躍する元日本留学生を毎年 100 名程度日本に招待し、元留学生相互の親睦、日本側関係者との交流を深めるとともに、日本の現状について再認識する機会を与えるもの。

外務省広報文化交流部の「外務省による留学生交流施策（現行）」<sup>5</sup> には、日本政府における留学生交流施策の協力体制が図示されている。これによると留学前の施策（日本留学の魅力を発信する積極的な広報・情報提供）と

帰国後の施策（フォローアップの充実）を主として外務省／在外公館が担当し、留学中の施策（日本留学の魅力を高めることを目指した教育研究水準の向上および受入れ体制の充実）を主として文部科学省が担当していることになる。前述した平成 20 年 7 月 8 日付（中央教育審議会大学部会留学生特別委員会）の「『留学生 30 万人計画』の骨子」とりまとめの考え方に基づく具体的方策の検討（とりまとめ）」に、帰国留学生に対するフォローアップ事業が留学生の受け入れ体制の中の一部として位置づけられていたことにもこのことが示されている。

筆者は今回の調査で在カンボジア日本国大使館の参事官および文化広報担当官と面談した。同日本大使館においても日本留学同窓生名簿を編集し、帰国留学生に対するアフターケアとして大使館主催のワークショップやパーティー等を行っている。筆者が訪問した折も、翌週の金曜日に元日本留学生を対象としたパーティーの開催が予定されていた。カンボジアの元日本留学生の総数は約 500 人ということであるが、同窓会に加入し、現在連絡が取れるようになっているのはその 5 分の 1 であるということであった。

帰国後同窓会に加入し活動をしていたが、数年後に勤務先が変わり、連絡が取れなくなるケースもあるようである。筆者がインタビューを行った元留学生の中にも、オフィスの電話番号とメールアドレスを連絡先としていたため、勤務先が変わってからは日本大使館と連絡を取らなくなったという者がいた。

### 1-3 日本学生支援機構（JASSO）によるフォローアップ

日本学生支援機構のホームページには、同機構（留学生事業部 交流事業課 フォローアップ事業係）が行っている帰国留学生に対するフォローアップ事業として以下の 4 事業が挙げられている。

#### (1) 帰国外国人留学生短期研究制度

留学を終え、現在、自国において教育、学術研究または行政の分野で活躍している帰国留学生に対し、我が国の大学で、当該大学の研究者と共に短期研究（60 日以上 90 日以内）を行う機会を提供するもので、対象者には、往復渡航費と滞在費が支給される。

#### (2) 帰国外国人留学生研究指導事業

留学を終え、自国の大学や学術研究機関で教育、研究活動に従事して

いる帰国留学生に対し、留学時の指導教員を現地に派遣（7日以上10日以内）し、研究指導等を実施するもので、派遣される指導教員には往復渡航費と滞在費が支給される。

(3) 帰国外国人留学生に対する専門資料送付制<sup>6</sup>

この制度は、外国人留学生が日本の大学院を修了又は留学期間を満了して帰国後、それぞれの専門領域の研究を進めて行くために必要な専門資料を当該外国人留学生の希望に添って無料送付することにより、日本留学の成果を一層高めることを目的としている。現行の制度（新制度）は平成20年2月1日以降に大学院を修了した者を対象としており、平成20年1月31日以前に大学院を修了した者には旧制度が適用される。送付の対象となる専門資料は、申請者の専攻分野に関連するもので、日本で出版されている既刊専門図書で一般書店にて入手可能なものとする。旧制度で送付の対象とされていた学会等の機関誌、研究紀要、論文誌は対象にならない。

(4) Japan Alumni eNews 「日本留学ネットワークメールマガジン」

日本留学を終えた元留学生を対象に「帰国外国人留学生メールマガジン」として配信が開始されたメールマガジンであるが、現在は留学前、留学中の学生もその対象とし、これら留学生と日本を繋ぐネットワークメールマガジンとして定期的（奇数月）に登録者に配信されている。登録（登録解除）はホームページの画面上でもできるようになっている。

上記4事業のうち、(3)の専門資料送付制度については、旧制度から新制度への移行に伴って内容（送付対象者、申請方法、送付期間等）が大幅に見直されており、事業は縮小傾向にある。これに対して、(4)のメールマガジンについては事業拡大の傾向にあり、全体的に確実に支援効果の上がる方策を取っていかうとしているようである。

#### 1-4 国立大学法人におけるフォローアップの現状

前述した文部科学省からの通知を受けて、各国立大学法人では国費留学生に関わらず留学期間を終了した留学生に対して、主として留学生課（国際交流課）が窓口となってその後の連絡先等の情報を収集し、連絡先データベースの作成にあたっているようである。長崎大学においても帰国後のフォロー

アップができるように、国際交流課が窓口となって本学を卒業・終了する留学生全員に対して「留学生修了者（帰国者）カード」への記入・提出を求めている。

フォローアップ関連で各大学のホームページ上に掲示されているのは、日本学生支援機構によって実施されているフォローアップ事業の内容に限られる場合が多いようである。しかし、神戸大学のように積極的に元留学生の同窓会設立に取り組み、国内卒業留学生同窓会やホームカミングデーの実施等<sup>7</sup>についてホームページ上にアップしたり報告書を作成したりしている大学も散見される<sup>8</sup>。鹿児島大学においては元留学生の現状を知ると共に彼らのネットワークを構築することを目的に2007年度に国際戦略本部により元留学生を対象にしたアンケート調査<sup>9</sup>が実施されている。回答者のうち希望者を対象にメーリング・リストが作成され、試行的に2007年11月と2008年3月の2回にわたってメール・マガジンが配信されている。

上述した「『留学生30万人計画』の骨子」とりまとめの考え方に基づく具体的方策の検討（とりまとめ）」に「大学等でも、最近、同窓会組織の構築・充実させこれを基にさらに優秀な留学生を獲得しようとする動きが見られるが、これが大学等の国際化の取組の一環として一層拡充されることが重要である。」と述べられているように、今後各大学で留学生の獲得とネットワーク構築等のために同窓会組織の設立に向けての取り組みがより積極的に行われていくものと思われる。

## 2. 帰国留学生に対するインタビュー調査

### 2-1 カンボジアにおけるインタビュー調査概要

2008年度までに長崎大学が受け入れたカンボジアからの留学生は4名で全員国費留学生（大使館推薦）である。4名とも学位（博士号）取得を目的として来日し、半年の日本語教育を経て大学院で所定の課程を修了、博士号を取得したのち、全員母国に帰国している。

カンボジアにおける訪問調査のきっかけとなったのは、留学生センターニュース10の原稿「卒業生たちの今」を1年前に博士の学位を取得しカンボジアに帰国した元留学生に依頼したことに始まる。その元留学生を通じて、これまで4名全員が学位取得後、母国に帰国していることがわかった。そこで彼らの帰国後の状況、現在のニーズ等を把握するためにカンボジアを



訪ね、インタビュー調査を実施することにした。

インタビューを行ったのは帰国留学生4名のうち3名である。インタビューができなかった1名は、カンボジアに帰国後、首都プノンペンで働いていたが転勤となり、現在ラオスのビエンチャンに勤務している。筆者がプノンペン滞在中に出張でビエンチャンからプノンペンに來ているという情報は得たのだが、うまく連絡が取れず、残念ながら今回は本人に会うことはできなかった。

3名に対するインタビューは日本語と英語で行った。インタビュー内容は、大きく「カンボジアに帰国してから現在まで」と「日本留学時代」の2つに分けられる。3名の帰国後経過年数は、長い順に10年、5年、1年で、現在の職種は、政府の省庁勤務2名、医学系研究所の研究員1名である。

以下、3名をABCとし、帰国後年数が経っている順にインタビュー内容を記述する。インタビューで得られた内容は、①帰国後の仕事と現在の状況、②日本留学時代、③日本留学で学んだこと・得たもの、④将来の計画、⑤帰国後の日本との関係、の5項目に分類した。

## 2-1-1 Aに対するインタビュー

留学期間：5年<sup>11</sup> 専門：医学 帰国後経過年数：10年

### <帰国後の仕事と現在の状況>

99年3月に帰国してすぐ、長崎大学で行ってきた研究が継続できる場所をカンボジア国内で探し、その当時唯一の研究機関であったパスツール研究所にコンタクトを取った。2000年1月にパスツール研究所に研究員としてのポストを得、2008年8月までパスツール研究所で働いた。2008年9月からはアメリカ大使館のメンバーとしてUSCDC（US center for Disease control）に研究員として勤務している。帰国後から現在まで留学時代と同様にはほぼ毎年論文の執筆、発表を続けている。研究者として働くことは医者として働くより収入はずっと少ないが、研究を続けることが日本での5年間の経験を生かしてカンボジアの国と人々の健康のために資することになるし、自分の使命であると考えている。

現在、月曜から金曜は研究所勤務で、土曜日は1日カンボジアの大学生に専門の講義をし、自分の知識を伝授している。家族と過ごす時間は日曜日だけ。長崎大学の指導教授も月曜日から土曜日まで働いていた。そしてい



ま、自分自身も指導教授と同じ働き方をしている。

### <日本留学時代>

とても幸せだった。月曜から土曜まで、週6日間研究室に行き、夜遅くまで研究した。ときどき日曜日も半日研究室に出ることはあったが、丸1日ではなかった。研究はもちろん難しい。普通勉強というのは簡単なものではない。だからそれを問題とは言えない。研究室での長時間にわたる研究も問題はない。それは自分がカンボジアの医学部で勉強した時と同じであるし、目的を達成するためには必要なことだった。

研究室以外では地域の国際交流グループのメンバーとの親交があり、グループ主催のイベントによく参加した。メンバーはみんないい人だった。

嬉しかったことはもちろん大学院を修了し博士号を取得した時である。また、リサーチデータを提出した時もこれから指導教授と論文執筆についてディスカッションができると思うと嬉しかった。一番嬉しかったのは国際的なジャーナルに論文が採用された時だ。留学で重要なことは指導教授の下で研究の方法を学び、多くの論文を出版し、その結果として博士号を取得することであり、この点で関係諸先生方に深く感謝している。留学は人生にとって意味のある経験だったし、日本の人にはこの奨学金のためにサポートしてくれたことを本当に感謝している。

### <日本留学で学んだこと・得たもの>

研究の方法（どうやってデータを収集し、プロポーザルを書き、論文を出版するか）

### <将来の計画>

これからもカンボジアで研究者として研究を続けたい。USCDC はカンボジア国立研究所を支援している。長崎とパスツールでの経験を USCDC でシェアしながらカンボジア国立研究所をパスツール研究所や日本の研究所のようなハイレベルな研究所にしたいと考えている。また、もし近い将来フェローシップ等で長崎大学に戻って研究するチャンスがあればスキルアップのために是非行きたいと考えている。

### ＜帰国後の日本との関係＞

帰国後もずっと留学時代の指導教授と連絡を取っている。また、パスツール研究所勤務時代は日本大使館で日本カンボジア同窓会に登録し、メンバーとしてパーティーやワークショップなどの活動に参加していた。USCDCに移ってから e-mail を変更したため大使館からの連絡が来なくなり、現在は同窓会メンバーとしての活動はしていない。

### 2-1-2 B に対するインタビュー

留学期間：5年 専門：水産 帰国後経過年数：5年

### ＜帰国後の仕事と現在の状況＞

帰国後すぐ農林水産省水産課に勤務した。その後順調に昇進し、現在は内閣府でフンセン首相が率いる「一村一品運動委員会」<sup>12</sup>のメンバーとして活動している。現在の仕事は留学時代の専門と関係はないが、直接国民のために働けることに喜びと充実感を感じている。

### ＜日本留学時代＞

文科省から十分な奨学金を得ており、生活面の心配はなかった。また、研究室には十分な実験施設があり、図書資料も揃っており、満足だった。心配なく研究に集中することができた。問題は日本語で、水産経済についての論文は日本語で書かれたものが多かったため、十分な情報を得ることができなかった。

また、はじめのうちは研究室での適応も難しかった。ヨーロッパでの経験<sup>13</sup>と比べて研究室で自由がないと感じた。先輩に従わなければならないし、厳しいルールがある。これが日本のシステムだとわかるまで1～2年かかった。しかし、指導教授との関係はとてもよかったし、研究自体はとてもいい研究ができた。それが一番大切なことである。

研究室以外の生活で「日本のお母さん」と呼べる人に出会えたことは非常にラッキーだったと思う。地域の国際交流グループで知り合って以来、留学期間中ずっと自分のことを家族のようにいつも気にかけてくれた。長崎の人はフレンドリーで優しいという印象を持っている。

### ＜日本留学で学んだこと・得たもの＞

多くのことを学んだ。ヨーロッパ留学中は夕方5時以降も大学に残って働く教授はいなかった。日本での長時間の研究、頑張って働くという環境に身を置いたことで、カンボジアに帰ってから政府の仕事に就いた時も、一生懸命働きたいという意欲があり、長時間労働にも容易に適應することができた。日本で一番学んだことは辛抱強さだ。

### ＜今後の計画・抱負＞

正直に言えば、政府で働くことはあまり給与がよくない。海外留学した人はサラリーマンのずっという会社や国際組織で働くのが一般的だ。しかし、これからも政府の仕事を続けたいと考えている。政府で働く目的は国と人々のために働くことだ。自分はここで生まれて、大学卒業までここで教育を受けた。この国のために、貧しい人のために何かしなければならない。

博士を終える前に日本学術振興会の特別研究員に応募したがだめだった。帰国してからも日本か他の国でポスドクをしたかったが、現在は自分の研究ではなく、家族と国の人のために働く時だと考えている。

### ＜帰国後の日本との関係＞

職務においてJAICAと協力して仕事を行うこともあり、そのことで日本大使館から夕食の招待を受けたことがある。「一村一品運動委員会」のメンバーとしても日本に派遣される機会がある。また、長崎大学との関係については、研究室の指導教授とは農林水産省水産課時代は継続的にコンタクトを取っていたが、仕事が一村一品になってからは専門が水産ではなくなり、それ以後コンタクトを取っていない。仕事以外では、結婚が決まった時に「日本のお母さん」を結婚式に招待した。

## 2-1-3 C に対するインタビュー

2008年3月帰国 専門：水産 帰国後経過年数：1年

### ＜帰国後の仕事と現在の状況＞

帰国後、環境省に勤務している。勤務内容は主にカンボジア国内の環境問題に関する調査で、地方への出張も多い。リエントリーショックから立ち直るのに3か月ぐらいかかった。現在、仕事が非常に忙しく、日本での研究内容とは全く違う分野での仕事内容で、新しく学ばなければならないことが多い。

### ＜日本留学時代＞

カンボジアには研究室はなかった。日本に行ったら本当の研究室があった。機械の使い方、試薬の作り方、使い方、全部新しいことで最初はわからないから難しかったが、研究ができることはうれしかった。人間関係の在り方（人と人との距離が遠い）にもとまどったが、自分から積極的に距離を狭めようと努力した。

博士終了の時は日本で1年ぐらい研究の経験を持ちたかった。卒業後留学生が日本で専門の研究に関する仕事に従事する機会を得ることは難しい。卒業した留学生の10パーセントぐらいが日本で研究助手などの機会を与えられるようになればいいのではないかと思う。

### ＜日本留学で学んだこと・得たもの＞

日本で研究の仕方を学んだ。また、一生懸命、頑張って働くこと、これが一番大切だということを学んだ。現在の仕事は超過勤務も多く非常に忙しいが、この仕事をこなしていけるのは日本での留学経験があったからだと思う。

### ＜今後の計画・抱負＞

長崎大学に戻り、ポスドクをやりたいという強い希望を持っており、現在、元指導教授と連絡を取っている。ただし、そのまま日本で研究を続けようと考えているのではなく、あくまでも国に戻って政府の仕事を続けることを前提にしている。カンボジアでは政府機関に勤めながら他の仕事をすることも可能なので、将来的には日本で行った研究を再開したいという希望もある。

## 2-3 考 察

今回インタビューを実施した3名中2名は帰国後結婚し子供もおり、仕事も順調で、公私ともに安定し充実した生活を送っている様子がうかがえた。1名はまだ帰国後1年と日が浅いが、日本でのポスドクも含め、様々な可能性を視野に入れながら母国での基盤を築きつつある様子が見て取れた。

この3名の共通点としては以下のことが挙げられる。

- ① 生涯カンボジアで働きたいと考えていること。
- ② 国(国民)のために仕事を通して力を尽くしたいと強く望んでいること。
- ③ 学位取得以外に日本留学で得たものとして、「一生懸命頑張るという精

神およびその態度」を挙げ、帰国から現在まで実際にその精神で頑張っていること。

- ④ 欧米諸国でいう、いわゆるミドルクラスの生活水準にあり、これからの国の発展を担っていく人材であること。
- ⑤ 博士号取得後、日本学術振興会の特別研究員などの方法で日本に残り、長崎大学で研究を続けたいという希望があったこと。<sup>14</sup>

筆者は依然バングラデシュを訪問し、そこでの日本語教育及び留学事情について調査したことがあるが、その折、数名の帰国留学生に対してインタビュー調査を実施した<sup>15</sup>。バングラデシュからの留学生の場合、正確な数字はわからないが、日本の大学で学位を取得後、母国には戻らず第3国（アメリカ、カナダ等）に渡る者の割合がかなり高いという印象を持っており、その時のインタビュー対象者の中で、日本で博士の学位を取得した者の内95パーセントはアメリカやカナダに行くと述べた者もいた。全体的なことは調査してみなければわからないが、長崎大学の場合、カンボジアからの留学生は、数は少ないものの、学位取得後全員が母国へ帰国していた。このことも今回のカンボジア訪問調査の理由の一つである。また、インタビュー調査で、3名とも学位取得後他国ではなく日本でポストドクを行いたいという希望があり、内2名は現在もその意思があるということがわかった。今後国を担っていく人材に育っている元留学生に対して、できうる支援を考え、何らかの方策を講じていくことが必要なのではないだろうか。

現在、学生総数に占める留学生の割合に加え、教職員の中に占める外国人の割合も大学の国際化に関する数値目標として明確に示されるようになってきている。インタビューにもあったが、長崎大学で学位を取得した留学生が何らかの形で大学に残れる形を作っていくことができれば、留学生にとっただけでなく大学にとっても有益となるのではないだろうか。

### 3. カンボジア訪問調査後の処理

#### 3-1 元留学生からの要望に対する対応

訪問調査を終えカンボジアから帰国後、インタビューを行った3名の留学生から受けた要望に対して以下のような対応を行った。

- ① 日本学術振興会の特別研究員に応募予定で、長崎大学でのポスドクを強く希望している元留学生については、博士課程在学時代の指導教授の研究室を訪問し、本人からの土産を手渡すとともに、カンボジアで撮影した写真とともに現在の職場での状況、本人の将来の計画等について報告した。また、近い将来、カンボジア訪問の機会がないかどうか打診した。
- ② 長崎大学で研究のブラッシュアップを希望している元留学生については、日本学生支援機構のフォローアップ事業の一つである「帰国外国人留学生短期研究制度」を紹介し、これに関連する日本学生支援機構のホームページ（英文ページ）のアドレス、および受け入れのためのコンタクトパースン<sup>16</sup>となる長崎大学医学部の教授の氏名とメールアドレスを調べ、送付した。
- ③ 長崎留学時代、大変お世話になった地域の国際交流グループのメンバーに近況を伝えてほしいという要望（全員から）については、この国際交流グループの代表者宛にカンボジアで撮影した3名の留学生の写真とともに彼らの近況を伝えた。
- ④ 長崎大学での留学時期が重なるバングラデシュからの元留学生（博士取得後、長崎大学で2年間助手を務め、バングラデシュへ帰国。現在本国の大学で教育・研究に従事）とコンタクトが取りたいという要望<sup>17</sup>があった、これについては、本人の了承を得てから、電話番号とメールアドレスを連絡した。

### 3-2 帰国留学生連絡先データベース

- ① 国際交流課にラオスに勤務する元留学生も含め、4人の現在の連絡先を報告した。
- ② 在カンボジア日本大使館にも同様に4人の現在の連絡先を報告した。

### 4. 今後の課題

帰国留学生のフォローアップを行っていくためには、言うまでもなく、元留学生の現在の連絡先を把握することから始めなければならない。各大学で連絡先データベースの作成に当たってはいるが、そのデータベースに記載されている内容の更新については十分に行われていない場合も多いであろう。前述した鹿児島大学のように帰国留学生に対するアンケート調査を実

施し、その調査データをもとにフォローアップ事業を実施しつつある大学もあるが、大規模な調査はかなりの時間と労力を要し、すぐに実行に移せる大学は限られるのではないかと考えられる。

帰国留学生のうち、特に国費留学生の場合は大学に在籍した年数も長く、今回のカンボジアでの調査でもそうであったが、指導教授との関係も継続している場合が多いと考えられる。これらの学生の場合、母国に帰国してから在外公館の同窓会に登録し活動している可能性が高い。現地での情報を持つ在外公館との協力も不可欠であろう。また、個人情報ということもあり、元留学生の連絡先データベースの扱いに注意は必要だが、学内に協力を呼びかけ、大学のホームページ上に教職員のみにアクセス可能な形でデータベースを公開し、連絡先（メールアドレス）の更新を依頼することもできるのではないだろうか。

また、数は限られるが、ターゲットを絞り、同窓会設立に向けて留学フェア、海外出張など様々な機会をとらえて元留学生とコンタクトを取り、会って直接彼らの声を聞く機会を持つことも必要であろう。今回のカンボジア訪問でも感じたことだが、帰国留学生の同窓会設立を考えると、顔の見える関係を作り維持しておくことは非常に重要であると考ええる。

長崎大学において、文科省の言うような「大学等の国際化の取組の一環として」同窓会組織の構築を含めた帰国留学生のフォローアップを考えると、従来の枠組みを越えて、留学生センターおよび国際交流課と国際戦略本部等が連携し、学術交流・国際貢献・留学生交流を含めたトータルな形でのフォローアップ事業を進めていく方向も考えていいのではないだろうか。

最後に今回のカンボジア訪問に際しては、空港への送迎から、それぞれの家族を連れての歓送迎会等、元留学生の皆さんに大変お世話になった。特に留学生センターニュースに原稿を寄せてくれ、この訪問調査のきっかけを作ってくれたニー・ライミトナさんにはインタビュー調査のためのアポイントメント等、訪問前から訪問期間中に渡って様々な手助けいただいた。ここに深くお礼申し上げる。

---

<sup>1</sup> この訪問調査は個人研究費による。

<sup>2</sup> [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/)



1249702.htm

<sup>3</sup> [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/06060129.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/06060129.htm)

<sup>4</sup> <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/culture/hito/ryu/index.html>

<sup>5</sup> <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/asia/kondankai/daigaku/siryou3.pdf>

<sup>6</sup> 新制度においては平成20年2月1日以降に大学院を修了した者を対象とする。

<sup>7</sup> [http://www.kisc.kobe-u.ac.jp/i\\_alumni.html](http://www.kisc.kobe-u.ac.jp/i_alumni.html)

朴鎮祐・瀬口郁子(2009)「神戸大学の留学生ネットワーク構築の取り組みと展望」『神戸大学留学生センター紀要』第15号 pp51-74

<sup>8</sup> 『第6回横浜国立大学留学生ホームカミングデー報告書』(2009)

<sup>9</sup> 『鹿児島大学留学生センター年報』(2007～2008)

<sup>10</sup> 長崎大学留学生センターが学内向けに年2回発行しているものである。

<sup>11</sup> 留学期間5年のうち、初めの半年は九州大学留学生センターで日本語教育を受けている。当時はまだ長崎大学に留学生センターが設置されておらず、大使館推薦留学生の日本語教育は九州大学で行われていた。

<sup>12</sup> カンボジアの貧困を減じるために導入が決められた。フンセン首相は日本から学ぶために一村一品の委員長になった。

<sup>13</sup> カンボジアの農業大学を卒業後、ベルギーとオランダへ留学(修士課程)経験有り。

<sup>14</sup> 国にいる家族の健康問題等、それぞれの理由で断念している。

<sup>15</sup> 松本久美子(2000)「バングラデシュにおける日本語教育・日本留学事情—現状と今後の課題—」『長崎大学留学生センター紀要』第8号 pp101-114

<sup>16</sup> 帰国外国人留学生短期研究制度は元留学先の大学での研究が義務付けられているが、留学時代の指導教授は本人が帰国後、他大学へ移動したため。

<sup>17</sup> この3名は長崎大学在籍時代、長崎大学留学生協会の運営委員として一緒に活動しており、バングラデシュの元留学生にコンタクトを取った際に、自分も是非カンボジアの彼らと連絡を取りたいので連絡先を教えてくださいと言われた。

